

「北辰其所に居て」

牛尾治朗

「今日はお元気そうですね」と申し上げると、「いやあ、丈夫なのは身体だけだよ。ここが弱いから苦労します」と、頭をさして体をゆすりながら、目を細めてほほえむご機嫌の大平さんの顔が思い浮かぶ。

二十年前から私はなんとなく大平さんとはうまがあつた。ちょうど今の私の年頃の時に、僕と大平さんが知りあつたことになる。大平さんにはものが言いくいという人もかなりいるが、僕は初対面の時から特にこの人には何でも言えた。情報を生々しく伝える、率直に直言することのできる人だつた。こう言えば喜んで下さる、こう言えばご機嫌が悪くなるなんてことを考えてしゃべつたことはないし、かなりご機嫌の悪い顔があつても、翌日そのことを忘れて同じテーマを繰り返すこともよくあつた。二十歳年下の、末弟の長兄に対する感情に近いものであつた。大平さんも、かなり言いたいことを言う人だつた。名台詞のなかには「この但馬の牛殺しに負けるとは……」、「これは僕のゴルフのスイングを見て発せられた言葉だが、以来一緒にプレーをしたグレラン製薬・柳沢社長の口を通じて「但馬の牛殺し」はかなり伝播した。

大平さんにはいろいろな人を紹介したが、なかんずく若い学者、文化人が好きだつた。「今まで若い学者さん達や女優さん達、音楽家の方達と一緒にうまい飯を食つてきました」なんて言うと、本当にうらやましそうな顔をされる。「君はいいね。君は人生を楽しんでる。君、政治家なんてものは何にもできずに、結局これしかできない」という者の集まりだよ」と言うのもご機嫌の良い時の台詞だつた。だから政治家に立候補という噂が出たり、

そんな打診があつたりする時に大平さんに相談すると、「牛尾君、政治家なんてものは宿命的にこれしかできない人がすること、君のような人がわざわざくるところじゃない」と、冗談らしく本気らしく答えるのが常だった。

晩年総理になられてからは、そんな大平さんが「これからの日本は、従来政治にかかわっていない人が政治にかかわることが必要な時代になった」と、大真面目に話されるようになった。私の都知事の話も、さりげなく、そんな雰囲気のみで話し合った。

「大賢は大愚に如かず」「大悟は赤子の如し」から「寸々着進、洋々万里」「大局着眼、小局着手」、晩年は「山上高山、山幾層」「春宵惜ムベシ」とか、いろんな言葉を書いてもらった。四年前「吉兆」で安岡正篤先生と久しぶりにご対面してもらった夜も、滋味のある会話に満ちた夕だった。その時同席した伊藤肇さんも、追いかけるように同じ病院で逝かれてしまった。

昨年の四月、井上靖先生が「北辰居其所、而衆星共之」について語られた。「北極星が、あるべき所にきちんと存在すると、多くの星もこれに従って、その場所を得るのです。そのようにして世の中はうまくいくんです。トップにある人は、北辰のようでなければなりません」。また、その時に「西行は六十九歳であの厳しい東北の旅に詩心を求めて旅立ちました。人間は、常に厳しく旅立つことを心掛けていなければなりません」という話もあった。この二つの話を大平さんに話したいと思いつながら、その後二、三回お会いしながら話しそびれてしまった。そして六月初旬のバリの、モンパルナスの小さなピストロで、若かぶと鴨の煮込みを、ポルドーの赤いワインで久しぶりにおいしく食べ、めずらしく十時半に床に入った。一時間後に大平さんの急逝を電話で知った。午前一時頃東京の香山健一さんと電話で話しながら、とめどなく涙が流れた。「北辰其所に居て……」、この話を帰ってからするつもりだったのに、と飛行機のなかで悔まれた。

(ウシオ電機会長)